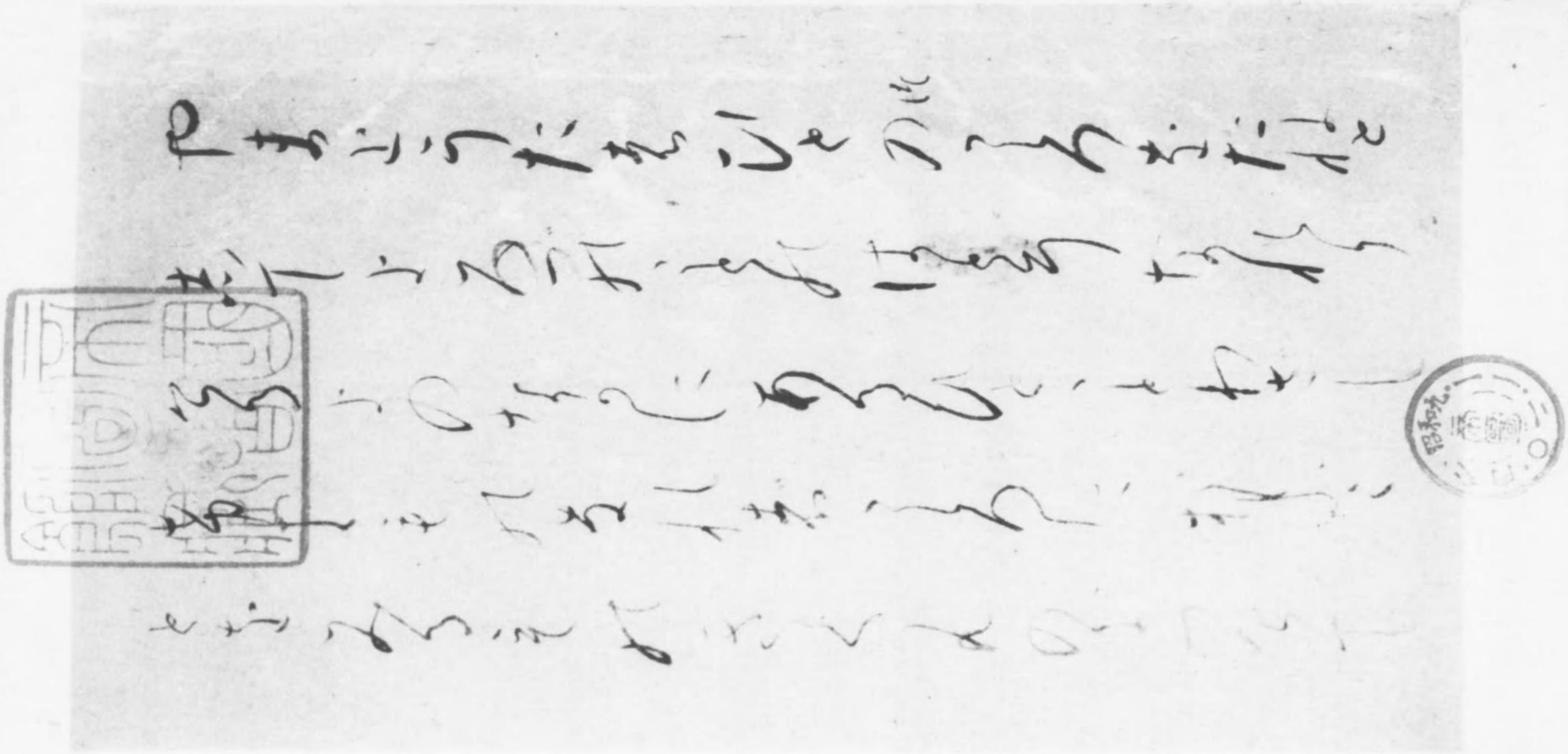
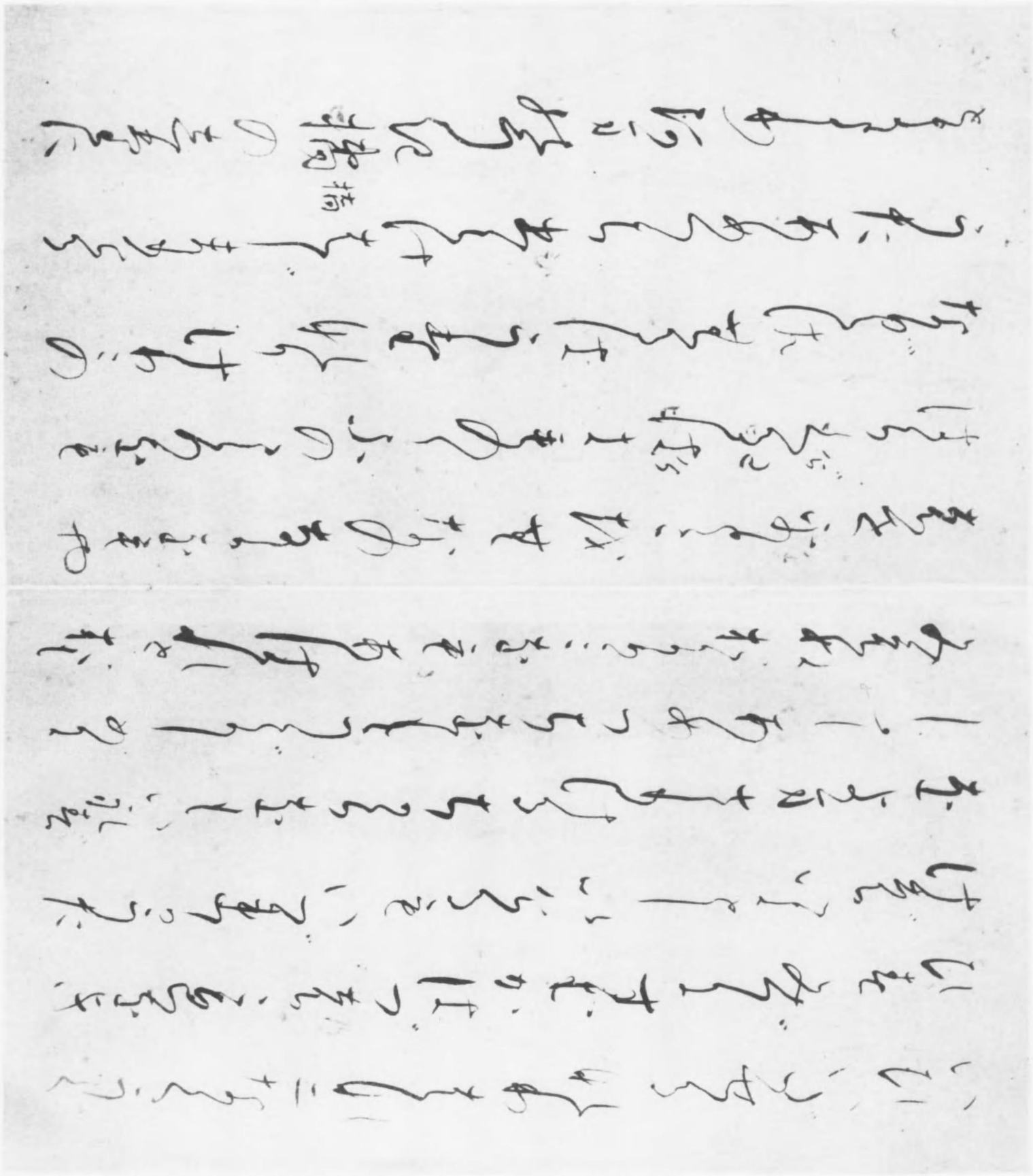
傳藤原佐理筋切一

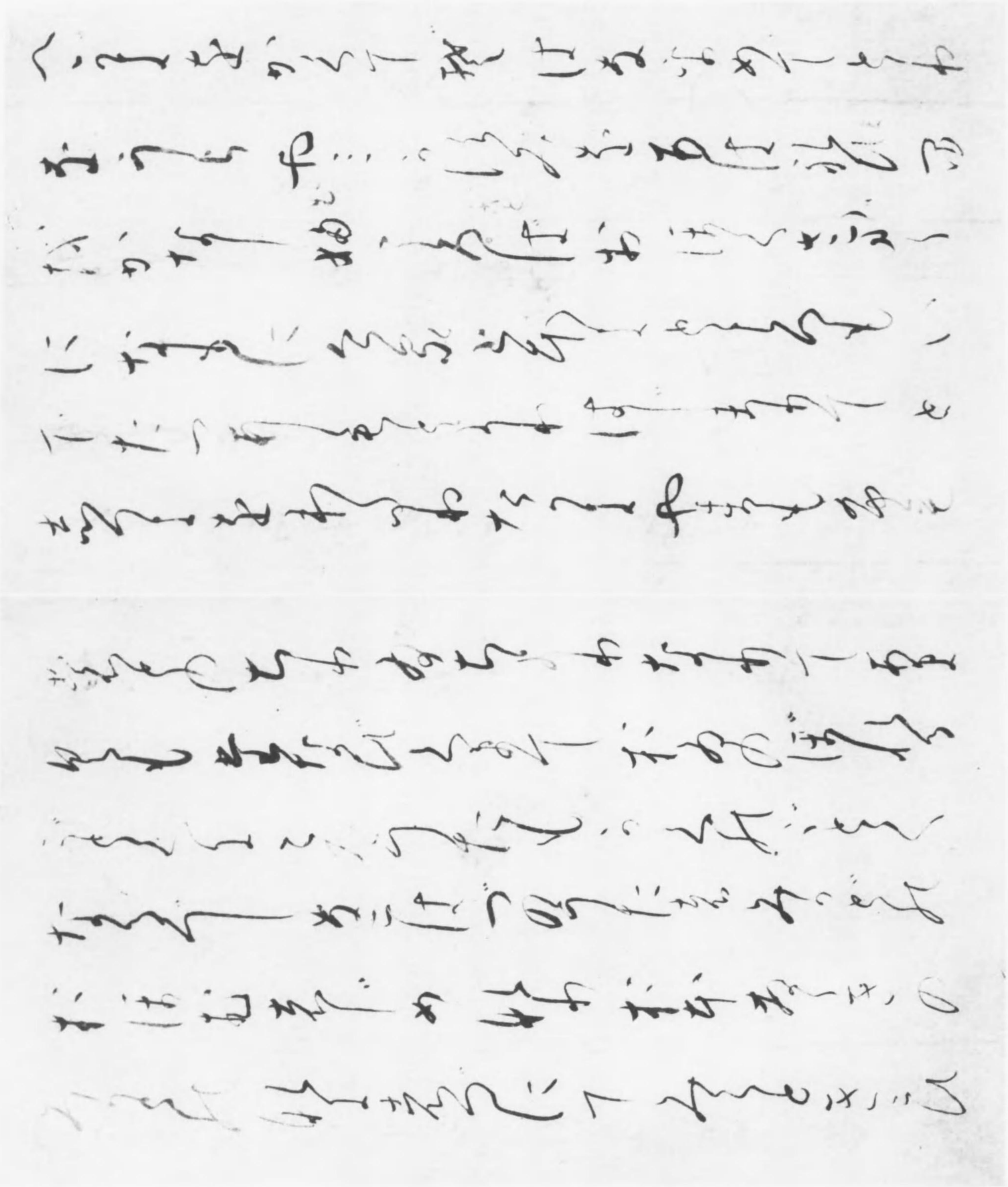
301
10

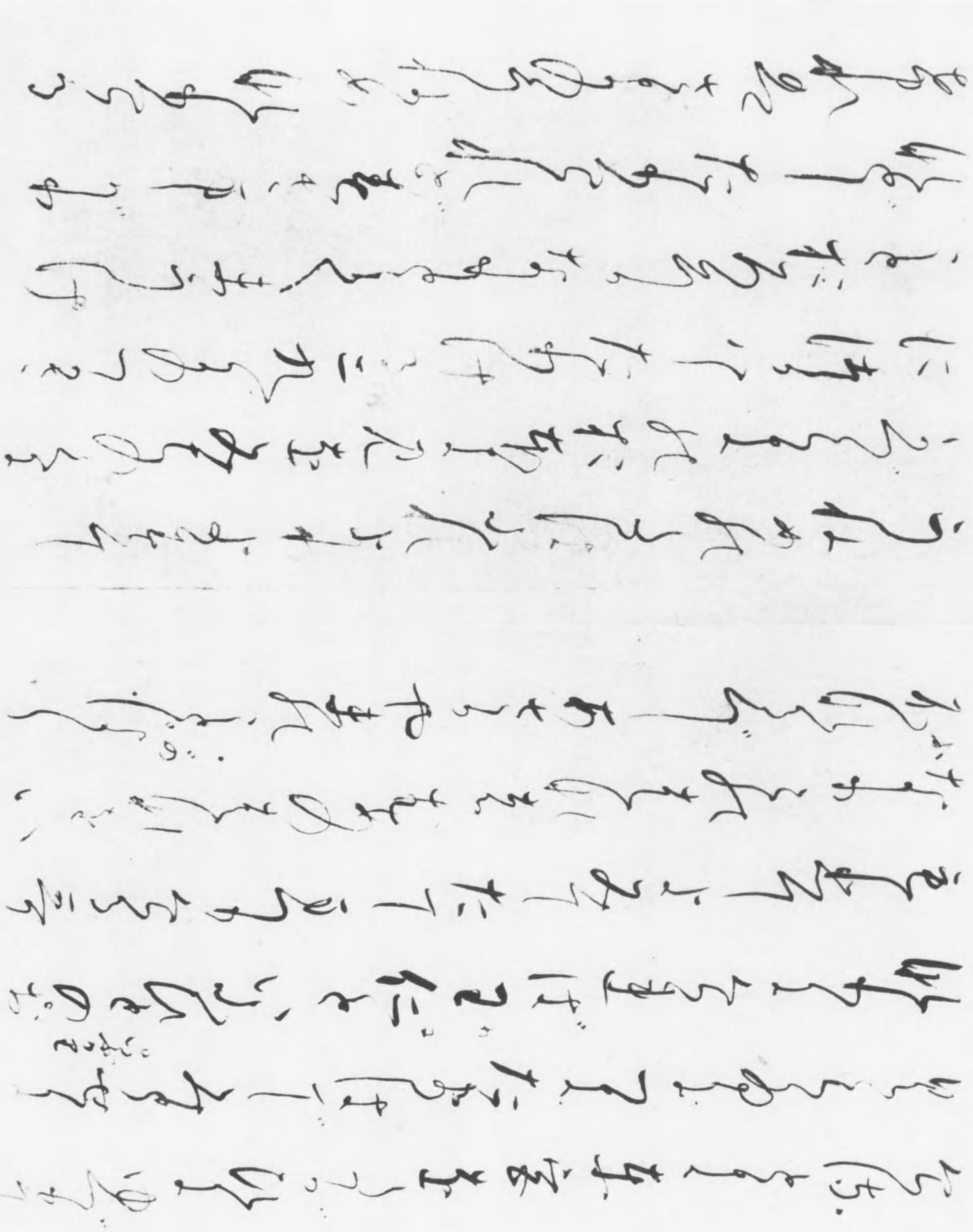
始

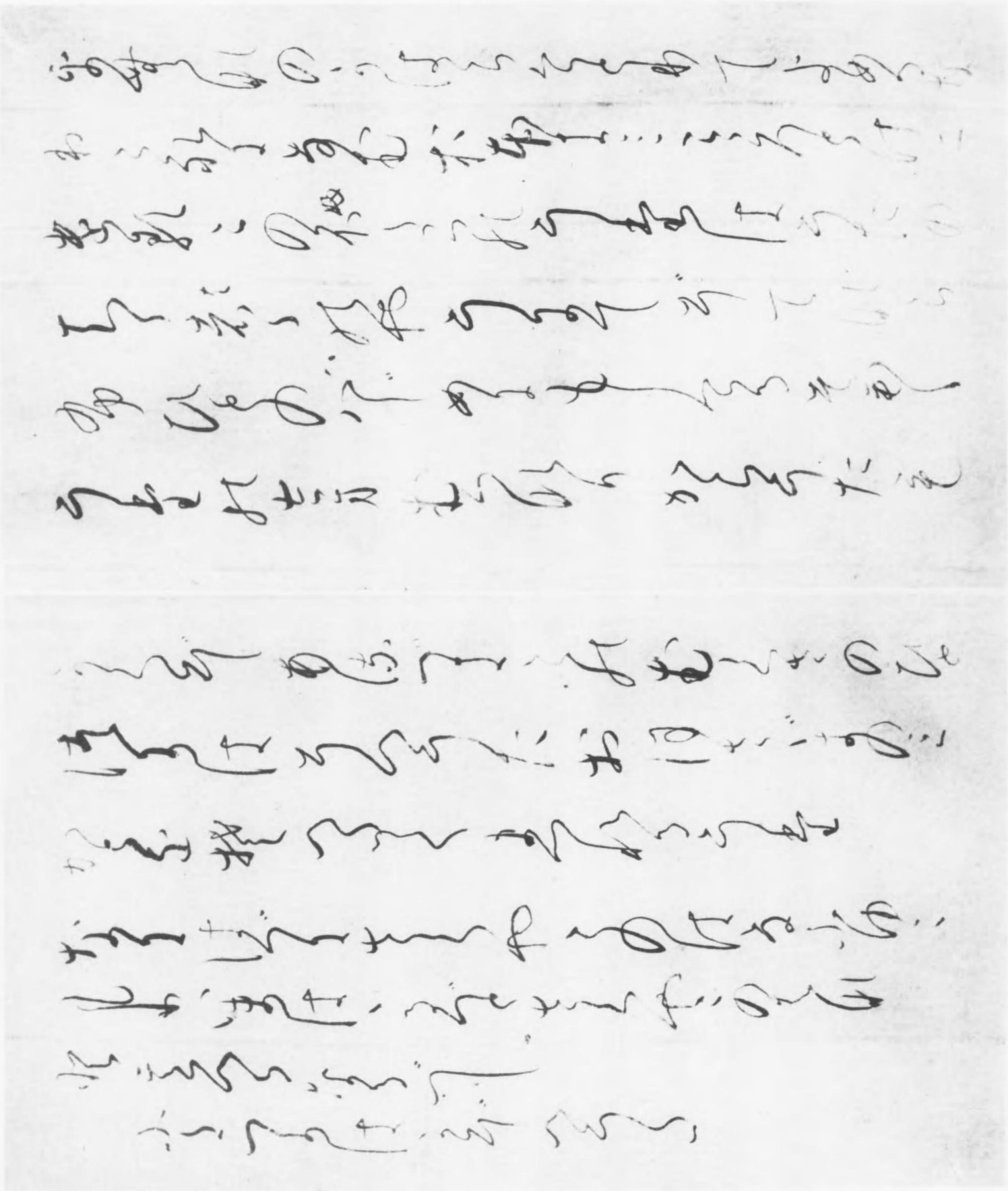




不うたたもて
とさゞまらあい
をしてこゝろわまかたり
ゆくらしひとのよと別れてよ
もさのをれみよ為そうこそと
しあるひとはよみけさ
いさのをれみこはあまてはおも
むなこのをれつこなわをもれとすこ
ふまはむをり いづてのくるみや
けるわしたふをを小のをこ
にやいスのくをれこるみてゞこ
つまつるなわ をしてこゝいるや
へこまつをこめ やへてつらそのや

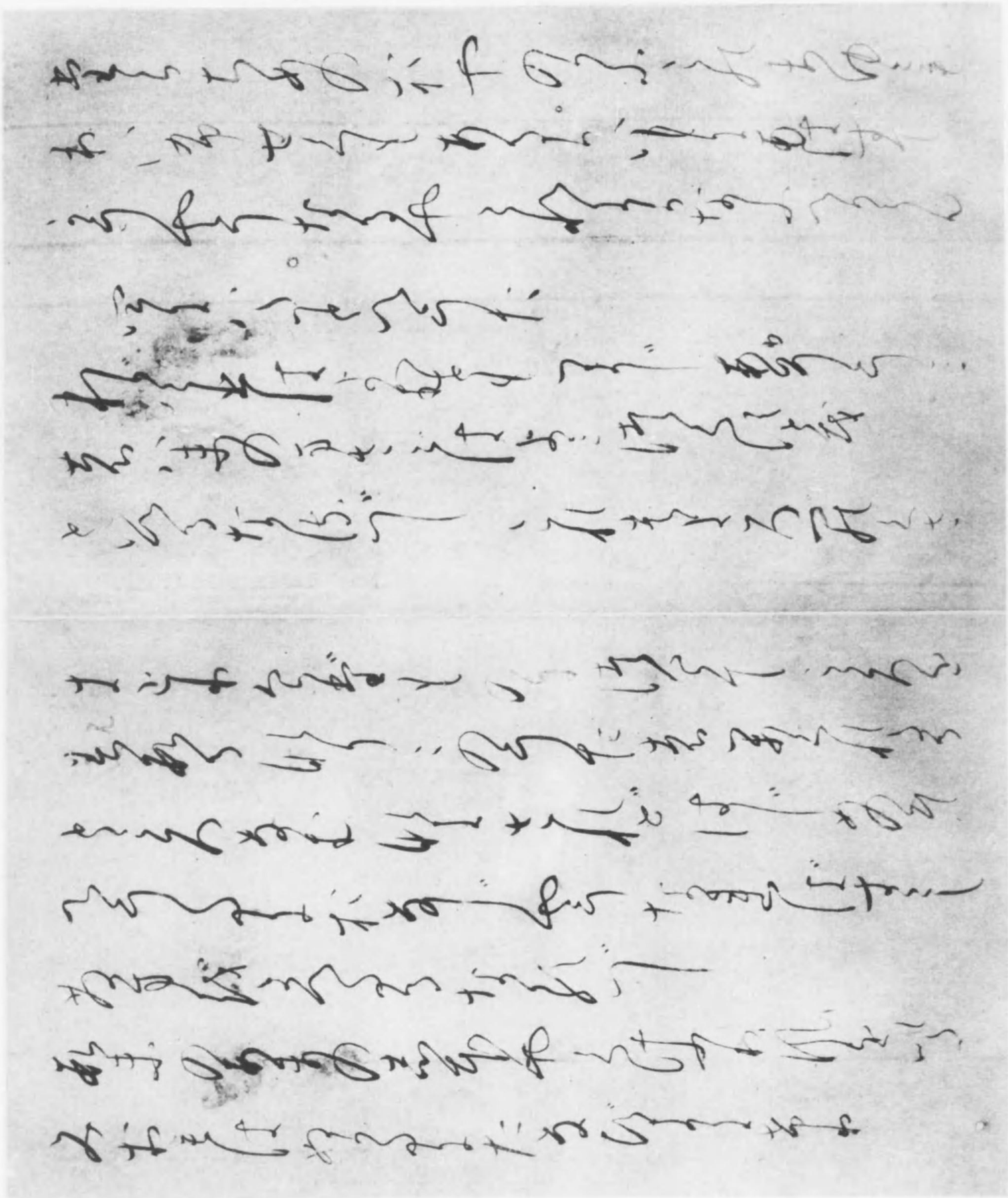


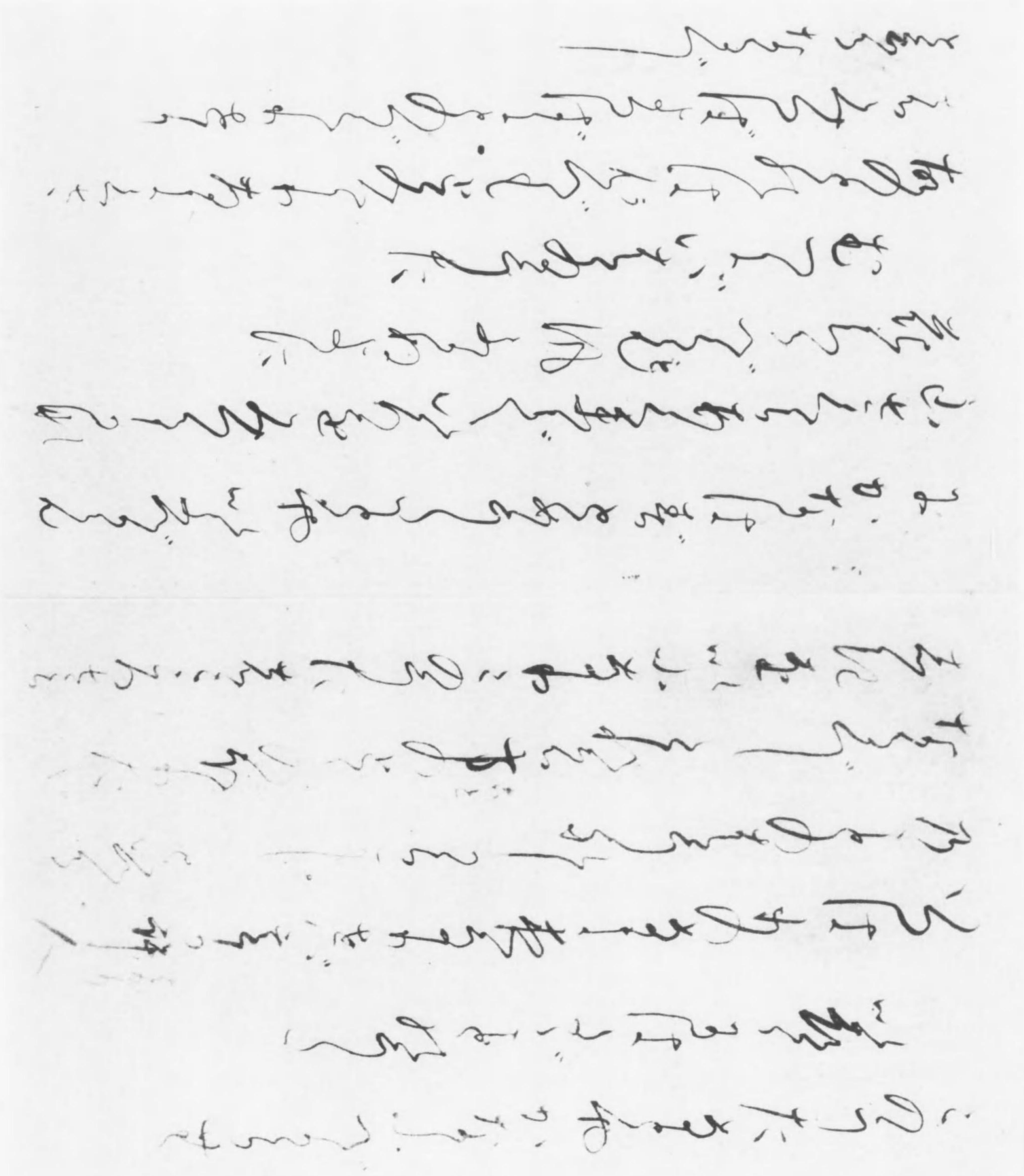


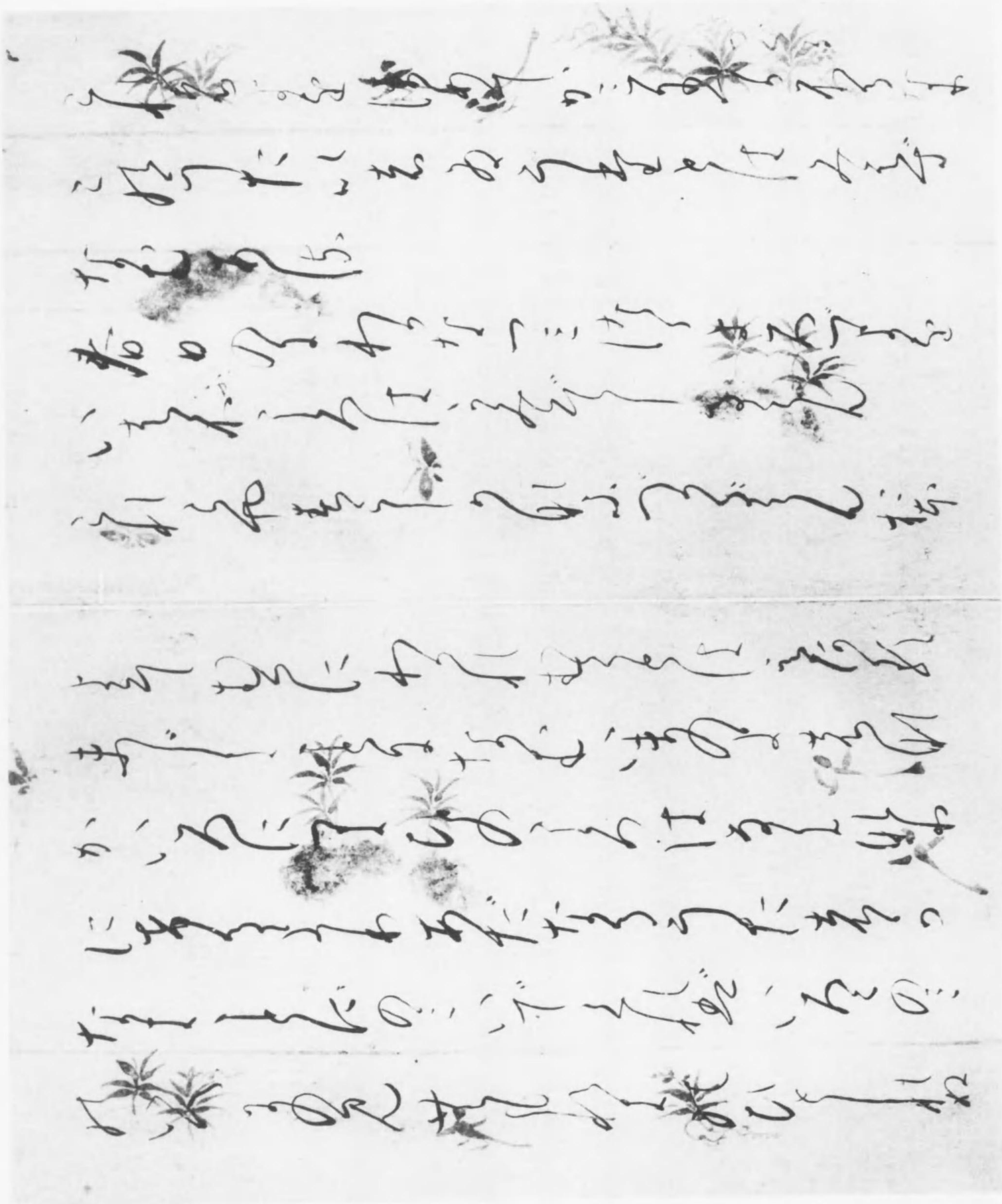


さくらはなおそくさくあめふる
ここなせさかりにてくもりあり
とくもりあり
はなはさくこころ
はやくまちにたとへなどとせめて
はやくこのこころいろ
こころのうちかな！

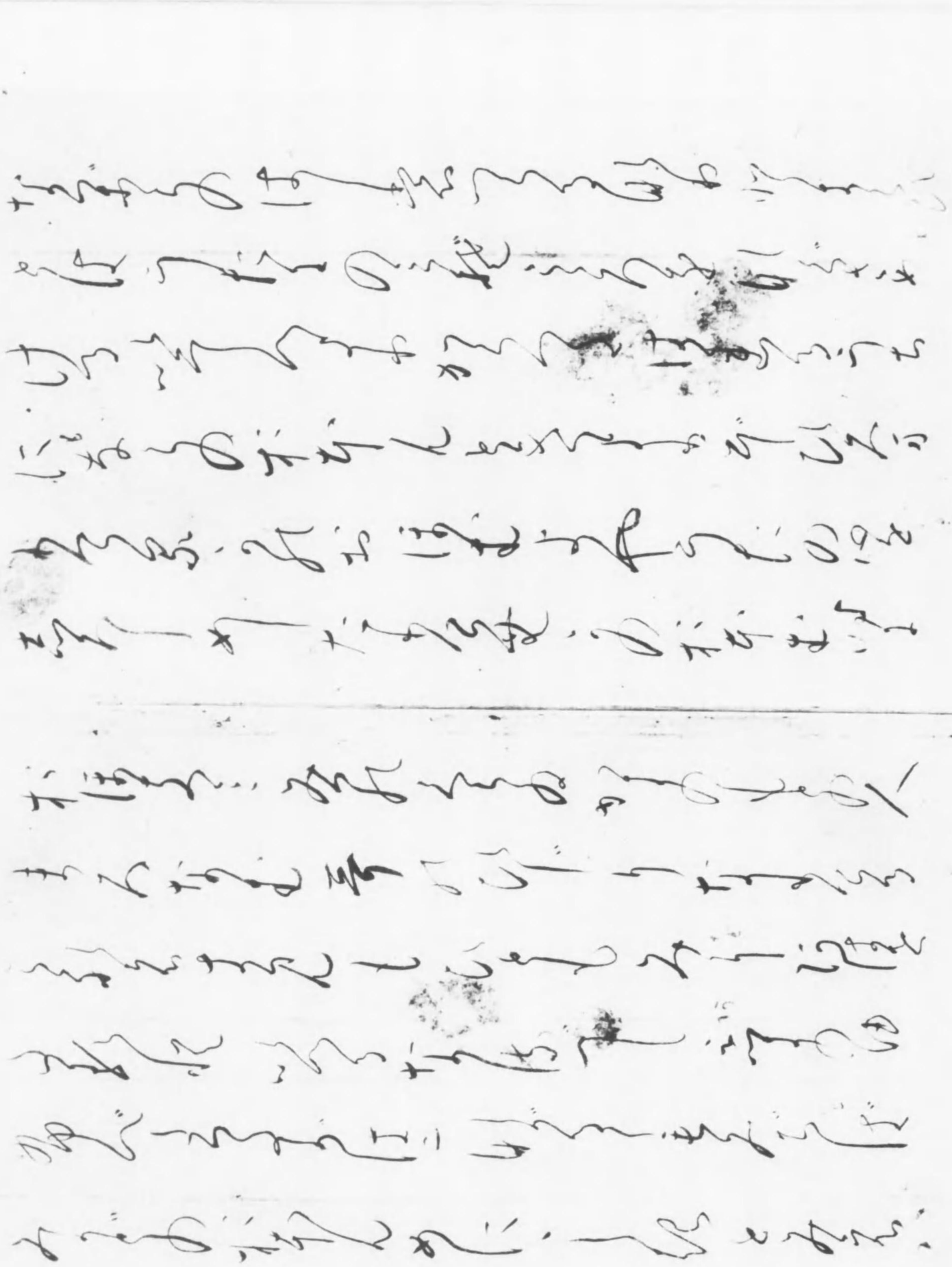
ゆうなまちこうた
まちまちはれ弱のはなさかりなる
おそくさきにまちわたる
とくもりなるべし
あらくもりあり
ものふはやこのうたなる
もちれ







うゑみのぶこゆゑ悲しきもなりこと
なるそをくさのゆゑとばのちわを
みくわづこをおどろあるほき
ゆふきをうえおごめくくをとし
なびよにわびたりあるをうと
ちりわあるはまるれなる我をけ
ちなりの尺をあらはのし
皇をなほ明らめ先行清みぎれ
仕をかぶへあるを者ちれ
ちをあるに義よりがと
きてよををみさうあと
をはあるのをほりよばるを



春のあしたよしのゝやまのさくらは
人まろが心にはくもかとのみなんおぼえけ
るまたやまのべの赤人といふひとあ
りけりうたにあやしくたへなり
けり人丸は赤人がかみにたゝむことかたく
とかたく赤人は人丸がしもにたゝむ

なむありけるはんあまりならのみか
どの御うた

龍田河紅葉亂天流めり和たら
者錦中や絶南

人麻呂

梅の花其共見えず膝(ひさ)方の天ぎ

[illegible]

[illegible]の浦朝霧[illegible]

陸行水行[illegible]

春日野[illegible]

[illegible]

[illegible]浦[illegible]

なき業をは[illegible]

このひと人を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふかくまけうとうけへのこころを
うるおぼをもしらわるにひと
わふたもしらいかれえるとこと
思わとこるわたるひとなるあはうあと
おそわこのもをはしたせたの
まれよはとうぶたるむなるにたら

味このもを行につはたるあた
うをは来るをおうなるまばしれ
れ所れかうもにそれをきこ
をうる人をいるを後はるか　信正通照
ふ言のをえるしどもまるまるか
ぶこもるるをなるをそまでに

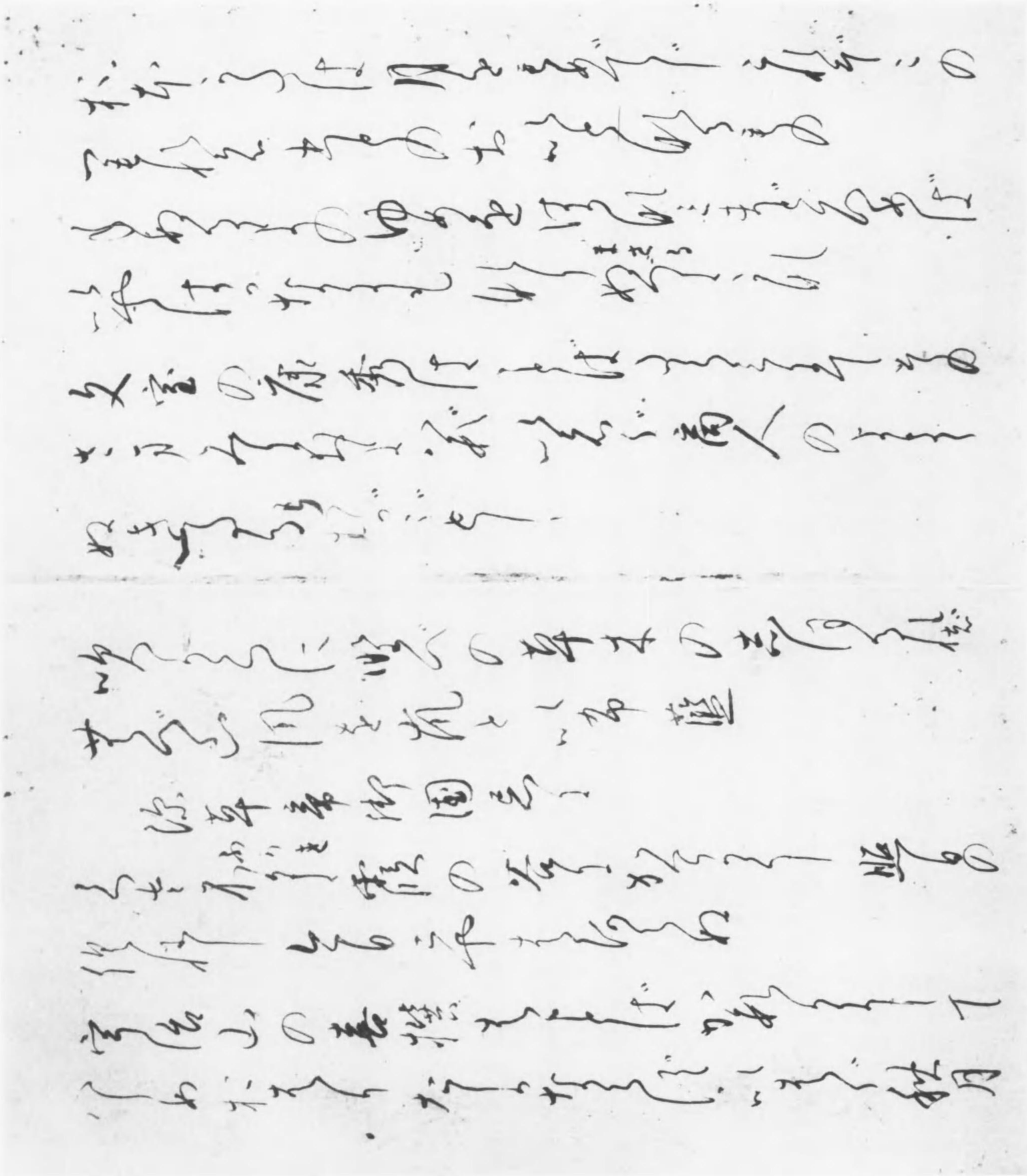
[illegible]

淺緑糸よりの白露を珠とも
貫けば香春の玉柳
蓮葉に溜る深き情なるかな
露を玉とあざむく
結城野にうつもれたる撫子

なつかしめて一生れつる許ぞ文なへ
四我おもふて人よかるな

在原の業平のいとあるじてことば
ありぶしがめる花のえなくてこそ
あれはてぬるかぶと

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我
身ひとつはもとの身にして



露光量違いの為重複撮影

むかしをたづぬ

衣通姫の歌

わがせこが　来ませる小野の　はぎ見ごと　咲きにけるかも

（二十巻　三七四五）

なにはは　春べ　なれば　梅の花　咲くべ　なりけり

（二十巻　四五一〇）

なにはづに　さくやこの花　冬ごもり　今は　春べと　咲くやこの花

（二十巻　四五一六）

なにはは　春べ　なれば　梅の花　咲くべ　なりけり

きてわたらむ　人のなき　なにはづに　さくやこの花

（二十巻　四五一〇）

なにはは　春べ　なれば　梅の花　咲くべ　なりけり

このほうの　ひとつ　そのなさこゆゑの　よ　おもはるるかな　ちとて

まつることは　おほえんぐ　おほえんと

301
10

えだもこのかぜにあなびきの
ものまばゝはちりそぐ
してまさきのかづらなつくつるは
わとものほとりをひさしくとぶなば
ゆかさまを知れの情をえるもん
人を大屋の月をみるごとくこゝな
しつをあるまゝ

終